



## 居眠りも力なり

誰もが齢を取る（老いる）のであり、そのことに肌や髪の色は関係ない。だが、“老い方”となると、民族によって違いが出てくる。アフリカと日本のその違いの大きなこと！日本人の平均寿命は世界一（83.7歳）、本書の舞台となるマダガスカルは65.5歳（140位）、エチオピアは64.8歳（141位）、ケニアは63.4歳（149位）である。「高齢者」になるのも大変なこの国々の人からすれば、高齢者が人口の26%を超える日本は、夢のような長寿国であろう。南部エチオピアのボラナ社会では、相手を祝福するときの言葉が、「豊かでありますように、長生きしますように」である。一方、日本の高齢者は「齢は取りたくないねえ」とため息をつく。

本書は、文化人類学者たちが長年のフィールドワークにもとづいて、アフリカの“老い”を描き出した比較民族誌である。孫を持ったら立派な老人であり尊敬に値するアフリカ社会では、老いは、日本のように“衰え”に直結するものではなく、むしろ“力”として息づいている。その「老いの力」が立ち現われる様々な姿と、それを支える制度や体系が、10人の執筆者のそれぞれの切り口を通して語られる。

彼らがいかに調査地の社会に溶け込んでいたか、表紙や巻頭のカラー写真が物語っている。おじいさん、おばあさん、長老たちの日常の光景は微笑ましく、また神々しく、カメラへ向ける彼らの眼差しからは、優しさ、厳しさ、寂しさなど、内に秘めた感情がこぼれ落ちている。アフリカの老いを理解するための鍵となる「祝福」や「呪詛」などは“迷信くさい”と映るかもしれない。だが、伝統的な制度や習俗との対話に、超高齢社会として問題が山積みであり、アンチエイジングの名の下、老年期が否定されている日本は、耳を傾けるべきなのである。

## アフリカの老人

田川 玄 他 編  
九州大学出版会



定価：本体 3,000 円 + 税

「老人とは誰もが自然になるものではなく、人生において達成しなくてはならない社会的な地位」

アフリカ社会に見られる「一夫多妻制」の報告では、80歳を超えても結婚しつづけ、子供約500人、孫1,000人以上、93歳で亡くなったときも生後間もない赤ん坊がいた精力絶倫のカリスマ老人と、妻に逃げられてばかりいて、おまけに度重なる病で盲目となったシングル老人という両極端の老いから、一筋縄ではいかない、一夫多妻社会の老年男女のあり方が、浮き彫りにされる。

「〈老いの力〉の息づくアフリカ社会を知ることは、私たちの社会において与えられる老いの否定性を相対化し、老いることの可能性を広げることにつながる。また、人間の普遍的な現象である老いがどのように作り出され意味づけられてきたのか、人間社会の本質を考えるヒントを与えるであろう」

遙かなる大地から、老いることの価値を問い直す。